龍谷大学
図書館報
No. 7

来・ぶらり

奈良絵本「住よし物語」（龍谷大学図書館所蔵）より

目次

これからの図書館像……1
経営学部長　井上清美
追跡〃R君の深草図書館見聞録……2
Information……4
私と図書館
「図書館……？」……5
理工学部助教授　竺　文彦
「図書館と読書」……5
社会学部4年　中根　真
アメリカ 図書館の体験 ……6
経営学部講師　トーマス・A・ライト
私の「精神の金庫」……7
経営学研究科　原　憲一郎
私の推薦図書
「草の花」福永武彦 著……6
文学部3年　宮崎暁子
「アルジャーノンに花束を」
ダニエル・キイス 著……6
文学部2年　西山　涼
「兎の眼」灰谷健次郎 著……7
経済学部3年　和田扶佐子
「さまよえる湖」スウェン・ヘディン 著……7
文学部4年　田口靖子
龍谷大学図書館の歴史(7)……8
法学部事務長　成山雅康

「これからの図書館像」

井上清美

龍谷大学は、第3次長期計画で三つのキャンパス・コンセプトを強調した。それは三つの図書館の今後のあり方（大宮一人文系、深草一社会科学系、瀬田一理工・社会学系）を示すものであり、個性化するということである。しかも全国的には、従来の研究重視だけではなく、教育重視を強調する大学改革が進行中である。このことは図書館が、研究のための蔵書数を誇る研究図書館としてだけではなく、大学に対する情報提供も重視する教育図書館の機能が今までより重くなることを意味する。このために、教育は教室内・外の2ルートで行われるが、教室外ルートの中で、図書館（員）は教員と教育情報交換をしながら、現在より重要な役割を果たし、よりスペシャリスト化することが要求される。これは逆に、教育の面で学生一図書館、教員一図書館の2つの関係を統一し、教員が図書館と今まで以上に関係を持つ必要性を示している。こうして本学の三つの図書館は、個性化するとともに、より研究・教育の情報センター化していくものと思う。

（経営学部長）

追

R君の深草図書館見聞録

—『分類カード』入門編—

さて、前回は「国際経済」というテーマのもと、レポート作成のため深草図書館閲覧係のKさんに文献の調べ方について色々と相談を持ちかけていたR君。とりあえずレポートは完成しましたが、まだまだ図書館の利用法については疑問ばかりが残っています。今回は、逆にR君が後輩(1回生)のS君に図書館利用法について相談を持ちかけられましたが、果して正確にS君の相談に返事が出来たのでしょうか。その様子をみてみましょう。

S　君：深草図書館にはたくさんの図書があるけれど、これは貸出手続を取れば全部借りることが出来るのですか。

R　君：全ての図書が借りることができるとは限らないよ。例えば、図書館入口の側に置いてある雑誌や新聞それに各種年鑑や白書は貸出をしてもらえないから、常設されているカード式コピー機で資料の必要な箇所を複写すれば自分の手元に残すことができるよ。それから最近流行っている視聴覚関係資料のビデオやCDも貸出は出来ないんだよ。

S　君：それじゃ、閲覧席に隣接した本棚に置かれているのが深草図書館の全ての図書なのですか。

R　君：それだけではないよ。深草図書館には閲覧カウンターで申込手続をすれば、係の人が取りに行ってくれる図書もあるから、このような図書を上手に活用していくためにも、図書館にある色々な目録を使いこなさないと文献を探し出すことが出来ないね。

S　君：『目録』ってどんなものなんですか。

R　君：『目録』とは、探している図書がどこにあってどんな形態をした図書なのか、示されたものだよ。例えば、図書館出入口付近にあるカード『目録』では、書名や著者名、分類別で調べることが出来るよ。それ以外にも『龍谷大学雑誌総合目録』のような冊子『目録』があるよ。

S　君：なるほど。『目録』を使うと図書利用も大変便利になるんですね。けれども、カードボックスにある『分類カード』ってどの様に使ったらいいのですか。図書を探すのに書名と著者名があれば充分だと思うのですが。

R　君：そうだよね。『分類カード』は僕もこの間少し使ってみたけど、どうもよくわからないんだ。なぜ、必要なのかな……？

跡 !!

友次　正之
木村　　優
小室　昌志
村穂　幸司

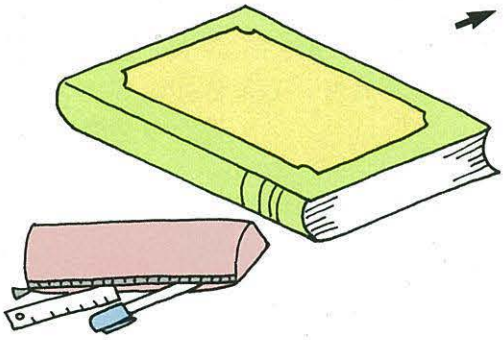
というわけで、この場ではR君は『分類カード』の使い方について、S君に答えることが出来ませんでした。これではR君のプライド(?)が許さないので、またまた閲覧係のKさんに尋ねることにしました。

R　君：実は『分類カード』の使い方がよくわからないので、どうすればうまく活用できるのか教えて欲しいのですが。

Kさん：まず『分類』という概念の説明からしましょう。『分類』とは、特定のテーマ(主題)によって分けられた集合と考えてください。つまり、図書館には何十万という図書資料がありますが、ただ単に野球選手みたいに登録された背番号だけをつけただけでは、どこにその本が置かれていて、どういう内容・種類の図書なのか皆目わかりません。利用者が使いやすいように、その本を読む前から、テーマによってその本を整理し、出来る限りテーマ単位の集合を形成することが出来るようにしています。その図書の大きなテーマから分類を与える訳ですから、１つの図書に対して、決して分類が１つとは限りません。ですから、分類上で多方面から検索を可能とするために、図書館では分類カードを用意しているわけです。また、叢書(シリーズ書)等の場合、例えば叢書名「夏目漱石著作集」の中で「こゝろ」が第何巻に収録されているのか知りたいとき、この分類カードを使用すればわかります。第１巻には「吾輩は猫である」、第２巻には「一夜・坊つちゃん・草枕」、そして「こゝろ」は第７巻に収録されているのがわかります。つまり１叢書を１単位として分類カードの集合が形成していますから、その内容を見ることができます。このように、単に書名・著者名カードだけでは探せなくても、分類カードを使えば簡単に探すことが出来ます。

R　君：よくわかりました。分類番号は、併せて図書の配置場所も示しているわけですよね。

Kさん：その通りです。分類番号は、図書の分類を示すと同時に、どの場所にその図書があるかまで示すことが出来るのです。　(次のページへ)



追跡!! R君の深草図書館見聞録

さてさて、『分類カード』の使い方がようやく理解できたR君は、自信をもってS君に説明することが出来ました。

現在、カード目録が置かれている深草・大宮図書館ではこの『分類カード』の使い勝手がわからず問い合わせに来る学生の数が非常に多いです。反面、瀬田図書館では、機械化による端末検索によって、この『分類』という問題に直面せずにある程度の検索が可能となっているため、むしろ機械の扱い方で質問が飛び交うことの方が多いようです。

我々、各図書館のスタッフは、図書館の利用について疑問に思っていることに、出来る限り迅速に答えられるよう努力しています。みなさんもR君のように図書館利用についてわからないこと・不明なことがあれば、どんどん図書館スタッフを利用して下さい。

さあ、次はどんな問題に立ち向かうのか、R君の図書館見聞録はまだまだ続きそうです。

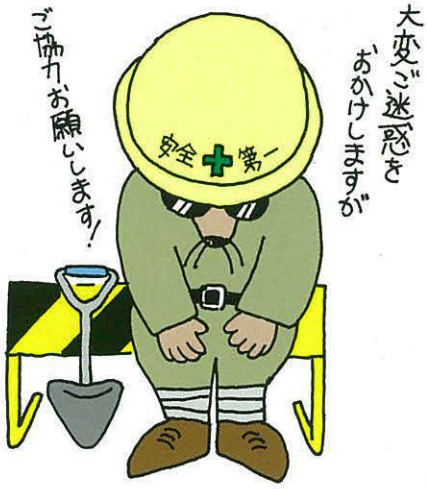
Information

“ガタゴト”と最近妙に図書館が騒々しくないですか？

別にこの『来・ぶらり』を読みながらしゃべっている「あなた」に注意を呼びかけているのではありません。

実は、1993年4月から稼動しはじめる図書館機械化の設備工事にともない、静寂な図書館を騒々しくさせています。

大変ご迷惑をおかけしますが、来春までの間、ご辛抱とご協力をお願い致します。



さて、深草・大宮・瀬田各図書館から耳よりな情報をキャッチしましたのでここに紹介します。

深草図書館：図書館新棟接続工事のため、1階にありました図書(新刊図書・花岡文庫・洗心文庫など)は書庫棟2階に移しました。書庫棟2階には自由に入れますのでご利用下さい。また、1部の研究室図書は別置していますので利用したい場合はカウンターまで申し出て下さい。

大宮図書館：『**秋季特別展　宗教関係文書展** ―大谷探検隊将来品を中心として―』

於：大宮図書館 展観室　　期間：11月16日(月)～11月21日(土)

を開催します。ふるって御参加下さい。

瀬田図書館：社会学部のみなさん！大変お待たせしました。ついに大宮図書館に所蔵してました旧社会学研究室図書の整理が出来、利用できるようになりました。迫る卒業論文・レポートなどにどうぞ御活用下さい。

私と図書館

「図書館……？」

竺　文彦

図書館というのは本を借りるところだと思っていたのですが、4年生になって卒業研究を始めて、文献調査の方法を教えてもらってからは図書館の利用の仕方が変わりました。ひとつ雑誌の文献を読むといくつかの文献が引用してあり、その中のひとつを読むと、またいくつかの文献がありということで、たくさんの文献を読まなければならないのですが、それらの文献をおおよそ読み終えると、そのテーマに関する状況が把握できたことになります。私の学生の頃は、現在のようにコピー機が普及していませんでしたので、文献を読みながら重要なところをメモしておくように習いました。今では、コピーしてしまうと読んだ様な気になって、結局読まないことも多く、紙のムダ使いだなーと思います。

文献を探すときには、「学術雑誌総合目録」(図書館のカウンターに置いてあります。)を使ってどこの大学の図書館にその文献があるのかを調べ、図書館を通して文献を取り寄せます。ただ、近くの図書館であれば直接行って調べることになります。ある大学の医学部の小さな図書室に行ったとき、係の人が一人しかおられず、初めてだったのですが、お茶やお菓子を出してもらったりして、ちょくちょく遊びに行くようになり、現在でもお付き合いさせていただいています。その後もいろんな図書館を利用してきましたが、小さな図書館の方が親しみやすいように思います。

(理工学部　助教授)

「図書館と読書」

中根　真

私に与えられたテーマは、「私と図書館」ということであるが、私が思うところ、これは「私と読書」と読み替えることができるのではないかと思う。

私と読書の出会いは……などと調子のよいことは書けないが、詰まるところ私の結論はこうである。(いきなり結論！)

それは、読書とは何も本を開けるところから始まるのではないということである。

つまり、読書するための環境づくりが先決だということである。まず、無性に読書欲をもよおしたその時に手元に手ごろな本がないというのは、ああ、なんと悲しいことか。これは、くしゃみが出そうで出ないときの感に似ている。いや、全くもどかしいことこの上ない。

だからである。本代をケチってはならない理由がここにある。私の持論だが、本との出会いは人との出会いに似ている。人には相性があるのと同じで本にも相性がある。本屋で、これはと思う本があれば、ためらうことなく買いなさい。一期一会と思うのです。

さて、もし買っても読まなければ……と思う方、ご安心を。積読も読書の内。もう、あなたの読書は始まっていますよ。

それでもなお、それはもったいないという方、どうぞきっぱり読書をあきらめて下さいな。あなたには読書が向いてない……。

と、そんなことはありません。自分で買わなくても買えなくてもいいんです。私たちには、立派な図書館があるからです。(ああ、やっとつながった……)

さあ、いよいよ「読書の秋」です。まずは本と友達になることから始めてみてはいかがかな。健闘を祈る！

(社会福祉学科4回生)

私と図書館

アメリカ　図書館の体験

トーマス・A・ライト

アメリカ・ウイスコンシン州立大学では大学院生も含めて四万人以上の学生が学んでいます。この大きな大学にとって図書館・図書室は欠かせない物の一つです。キャンパス内には大(大きなもので十階だてのビル)小、二十以上もの図書館や図書室があり、大きな役割を果しています。一つはもちろん資料や本を探したり、借りたりすることですが、学生にとってもう一つの大きな目的は図書館を静かな勉強の場として利用することです。

図書館は全部コンピューター化されており、どこの図書館からでも本や資料の有無所在など知りたいことが簡単に調べられる仕組みになっています。ほとんどの場合各自が自由に機械を操作して探せるし、棚から取り出して見ることも自由、コピーもセルフサービス、本は学生証一枚で借りられます。

勉強の場として使う学生のためには色々な工夫が見られます。早朝、授業の前の七時から開いている所もあれば、夜利用したい学生のためには夜中まで開けている所もあります。大きな図書館はもちろんのこと、小さな所でもほとんどは毎日、週末も含めて利用できます。期末試験前の一週間は二十四時間開けている所もあります。他の利用者の迷惑にならないように資料に関しての質問や借り出し手続きの場所は少し離れた所にあり、そこでは周りを気にせずに話せます。又、勉強しながら飲食したい学生のために部屋もあり、そこでは缶ジュース、コーヒーやサンドイッチも買えます。グループで話し合って勉強をするための個室が用意されている所もあれば、くつろいで読書ができる様にソファーがある図書館も多くみられます。図書館なしの大学生活は考えられません。

(経営学部講師)

私の推薦図書

「草の花」

(新潮文庫)　福永　武彦 著

あまりにも純粋に真実の愛を求めたために拒まれ続けた汐見茂思。彼を夢見る人だとその愛を受け入れ得なかった二人の兄妹。果たして彼は本当に理想を夢見ただけの人だったか。悲し過ぎる程孤高に自分の愛を見つめ、貫き通した彼こそ現実の人ではなかったか。自殺行為にも似た危険な手術を自ら選び、術中死した彼の残した手記。そこに綴られた過去は、日常に流され、何かを見失いそうになったとき、強く私の心を支える。

(文学部3回生　宮崎暁子)

「アルジャーノンに花束を」

(早川書房)　ダニエル・キイス 著

氷室京介の曲によって一躍有名になった感があるが、この作品は決して一過性のブームで終わらせるべきものではない。人間にとって本当に必要なものは何なのか、この作品には明瞭な解答が与えられている。一冒頭では戸惑うかもしれない。しかし、これは巧妙に企画された上でのことである。読み進めていくうちにきっと、冷徹な観察眼と確固としたヒューマニズムに裏打ちされたこの作品のとりこになるだろう。

(文学部2回生　ペンネーム:西山　涼)

私と図書館

私の「精神の金庫」

原　憲一郎

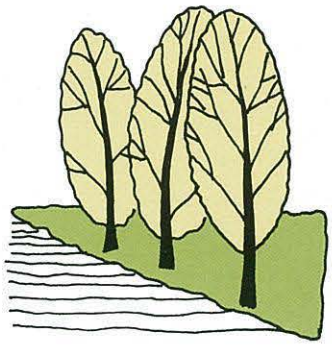
「精神の金庫」これは宮本輝氏が氏の小説「命の器」で氏と図書館との思い出の中で使っていた言葉であるが、私にとっても図書館は、まさに「精神の金庫」のようなものである。

私は大学院に入学以来、三ヶ月とまだ日は浅いが毎日深草図書館を利用する。この見た目にもどっしりとしたレンガ造りの建物は、私にとってはどことなく重みのある巨大な金庫のように思えて仕方がない。そしてその大きな金庫の中にはもはや手に入らぬような貴重な文献などがびっしりと、そして係の方々によって大切に保管されている。

毎日読んでも死ぬまでに読み切れないほどの多くの蔵書……。その中から研究の時には自らのテーマに沿った専門書を読み、そして社会の情報を得たい時には数多くある雑誌から選んで読む。また一方では辛いことや悲しいことがあった時には元気の出るような小説を読み励まされ、様々な問題に直面し迷い悩んだ時には思想書や宗教書を読み勇気づけられるのである。

このように図書館は、いつも私の心の欲求やぽかっと空いた空白を心やさしく充足してくれる貴重な存在なのである。この大切な図書館を私はいつでも好きな時に自由に活用することができるのである。なんと素敵なことだろうか。まさに私にとっての図書館は宝物であり「精神の金庫」だといえるのである。

（経営学研究科Ｍ１）



「兎の眼」

（新湖文庫）　灰谷　健次郎 著

人々は「合理化は正しいものだ」と考えがちである。我々は無駄とも思えるが、しかし一番大切なものを見失ってはいないだろうか。無駄のない人生は空虚なものである。この本は私達に「くさみある人間にもどれ」と呼びかけているのではなかろうか。

（経済学部３回生　和田扶佐子）

「さまよえる湖」

（角川文庫）　スウェン・ヘディン 著

「さまよえる湖」は、井上靖氏の作品で知られる楼蘭と共に幻の湖として長い間姿を見せなかったロプ湖のことです。ヘディンは彼の最後の探険でこれを発見し楼蘭の存在も明らかにしました。この記録考古学的なことよりはむしろヘディンが地理学者であるので、地形や地質の描写が細やかで、無機的な砂漠と生命の源である水が印象深く感じられます。日本にいればあまり意識することのない水ですが、それは本当に生命の源だなと新めて思いました。

（文学部４回生　田口靖子）

龍谷大学 図書館の歴史6

― 敗戦直後の図書館 ―

成山雅康

龍谷大学図書館の歴史を学林創設の江戸時代から第2次世界大戦の敗戦迄をトピック的に紹介してきたが、今回は敗戦直後の図書館の状況を簡単に報告したい。

国体図書の悲劇　第5回「戦争と図書館」で紹介した通り、戦前・戦中の思想統制はヒステリックなまでに行われ、あらゆる出版物は検閲を受けなければならなかった。社会主義思想図書は勿論のこと、自由主義図書、地図、統計書等が大量に発禁処分を受け、出版中止・図書館からの没収・焼却の運命をたどった。如何に狂気の社会とは言え、人類の知的遺産を後世に伝えるべき任務を課せられた図書館にとって、恥辱以外の何物でもなかった。残念ながら本学図書館とて例外ではなかった。

残念ながら、こうした思想の抹殺行為は戦後も繰り返された。1945年8月の『図書館日誌』の記事からいくつか抜きだしてみよう。

> 司事会議あり。大東亜戦争関係図書に就て、その処分法の指示あり。当館としては、とりあえず、文部省思想局よりの秘の報告のみ焼却することに決定、処理す。(8/27)
>
> 戦争関係図書の考慮を要するものの基本カード抜出す。(8/28)
>
> 戦争関係図書の抜出。(8/29)

以上の記事から推察できるように、戦前・戦中の過ちが占領軍を恐れるあまり、自己規制として再び繰り返された。『図書館日誌』では確認できなかったが、戦争や全体主義・国体思想を鼓舞した図書は大宮図書館地下階段下倉庫に集積され、1980年代まで人目に触れることはなかった。1946年には他大学でも、占領軍の意向による文部省からの宣伝刊行物没収に関する通牒に基づき国体思想や軍国主義的な図書が書架から除かれている。

図書館の意思にかかわらず、思想を選別し、抹殺行為に協力せざるを得なかったとは言え、拭いきれない汚点を残したと言えよう。

図書館施設の復旧　終戦直後の図書館では、社会体制の否定という混乱の中で、とりあえずこうした国策図書の抜き出しと並行して、戦時体制の解除作業が実施された。

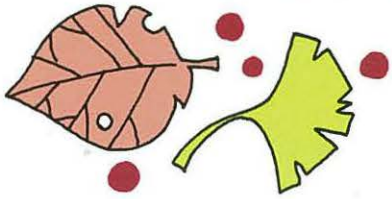
第1は、防空壕の埋め立て、建物内の防火用砂の撤去、書庫各層に配置された消火用の貯水槽の撤去などの図書館防衛用の各種施設等の復旧作業である。

第2は、戦時中に空襲を避けて地方に疎開した貴重図書の引き取り、書架配架である。社会混乱の中で運送手段の確保や人員の確保が困難を極め、京都日野誕生院からの引き取りは翌年まで実施できなかった。しかし、第2次疎開として梱包されたものの、候補地が決まらないまま保留されていた明版大蔵経がようやく書庫に戻された。(10/22)

第3は、開店休業状態となっていた閲覧業務の再開である。復員または勤労動員先からの解除によって学生が大学に復帰し始め、その空白を埋めるかのごとく閲覧者が急増した。戦中、図書館員の減少に従い、閲覧室を2階に集中し開いた1階閲覧室は1945年3月より西本願寺宗務所が使用していたため、閲覧者の増加に対応できなかった。そのため、応接室を臨時の学生閲覧室に転用して急場を凌ぐとともに、宗務所移転に併せて1階閲覧室を復旧整備し、閲覧事務を再開した。(11/15―20)

このような作業を経て、施設の復旧が図られ、徐々に大学図書館の様相を取り戻した。

(法学部事務長)



龍谷大学図書館報『来(らい)・ぶらり』第7号
1992年10月発行
編集・発行　龍谷大学図書館
〒612 京都市伏見区深草塚本町67
☎075-642-1111(代)